

CLUSTERPRO

MC RootDiskMonitor 2.10 for Linux

はじめての RootDiskMonitor

© 2025(Apr) NEC Corporation

- ☐ はじめに
- ☐ 製品概要
- ☐ 監視の設定と実践
- ☐ おわりに

はしがき

本書は、CLUSTERPRO MC RootDiskMonitor 2.10 for Linux(以後 RootDiskMonitor と記載します)による OS ディスク監視および HW-RAID 監視機能による HW-RAID 監視の基本的な動作について記載したものです。

※HW-RAID 監視機能は Express5800 シリーズの 以下のパッケージから制御可能な HW-RAID コントローラーを搭載した環境でのみ機能します。

- Universal RAID Utility
- HPE Smart Storage Administrator

(1) 本書は以下のオペレーティングシステムに対応します。

x86_64 搭載サーバー

Red Hat Enterprise Linux 6.0～6.10

Red Hat Enterprise Linux 7.0～7.9

Red Hat Enterprise Linux 8.0～8.10

Red Hat Enterprise Linux 9.0～9.5

Oracle Linux 6.2～6.10 ※

Oracle Linux 7.0～7.9 ※

Oracle Linux 8.0～8.10 ※

Oracle Linux 9.0～9.5 ※

Amazon Linux 2 ※

Amazon Linux 2023 ※

※Oracle Linux または Amazon Linux 2 以降のオペレーティングシステムでは、HW-RAID 監視機能はご利用いただけません。

(2) 商標および商標登録

- ✓ Red Hat、Red Hat Enterprise Linux は、米国およびその他の国における Red Hat, Inc. およびその子会社の商標または登録商標です。
- ✓ Oracle は、Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。文中の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。
- ✓ Linux は、米国およびその他の国における Linus Torvalds の登録商標です。
- ✓ Dell, EMC, および Dell, EMC が提供する製品およびサービスにかかる商標は、米国 Dell Inc. またはその関連会社の商標または登録商標です。
- ✓ その他記載の製品名および会社名は、すべて各社の商標または登録商標です。
- ✓ なお、本書では®、TM マークを明記しておりません。

目次

1. はじめに	1
2. 製品概要	2
2.1. 製品概要について	2
3. 監視の設定と実践	8
3.1. インストール	8
3.2. 設定ファイルの作成	10
3.3. 監視の開始	11
3.4. 監視状態の確認	13
3.5. ディスク障害の検知の確認	14
3.6. 監視の復旧	19
3.7. 監視の終了	21
4. おわりに	22

1. はじめに

本書では、RootDiskMonitorによる OS ディスク監視および HW-RAID 監視機能による HW-RAID 監視の基本的な動作について説明します。

OS ディスク監視および HW-RAID 監視の設定・監視手順を一連の流れで確認することで、RootDiskMonitor および HW-RAID 監視機能の動作を理解することができます。

本書では、以下のような監視例を使用します。

- ・ RootDiskMonitor による OS ディスク監視
- ・ HW-RAID 監視機能による HW-RAID 監視
- ・ 疑似障害コマンドによる障害検知

なお、各パラメーターの意味や詳細につきましては、

「CLUSTERPRO MC RootDiskMonitor 2.10 for Linux ユーザーズガイド」および「CLUSTERPRO MC RootDiskMonitor 2.10 for Linux HW-RAID 監視機能 ユーザーズガイド」をご覧ください。

本書では以下の手順で OS ディスク監視および HW-RAID 監視を行います。

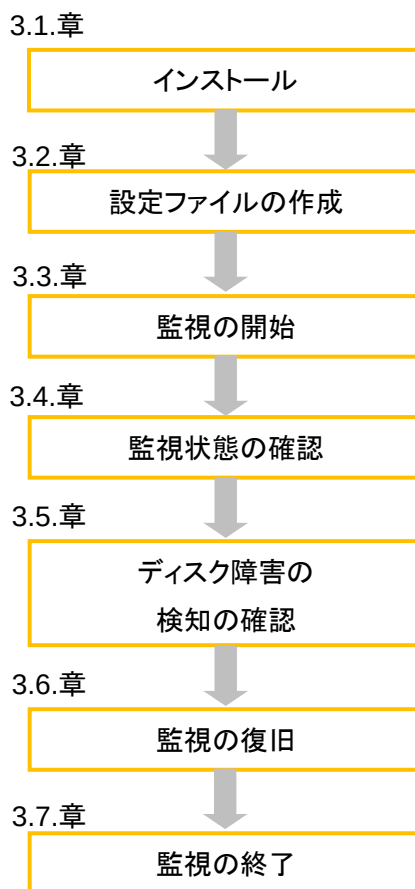


図 1 内蔵ディスク監視手順

2. 製品概要

2.1. 製品概要について

RootDiskMonitor には以下の機能があります。

◆ I/O パス監視機能

OS ディスクを構成する I/O パスに対して死活監視、I/O リクエストのストール監視を行います。

◆ 障害レポート機能

I/O パスを定期監視し異常を検出すると syslog、コンソールに異常レポートを通知します。

◆ クラスタウェア連携機能

OS ディスクを構成する I/O パスがすべて障害となり、LUN (論理ディスク装置) へのアクセスが不可能になると、クラスタウェアと連携することによりノード切り替えを実現します。

クラスタウェアと連携しノード切り替えを実現するには以下の 3 つの手法があります。

- ・ CLUSTERPRO のサーバー管理プロセス (clpnm) を強制終了させる方式
- ・ OS ディスク監視専用のクラスタリソースを作成する方式
- ・ Linux のシステムメモリダンプを採取し、OS を強制的に停止させる方式

※クラスタウェアを利用しない非クラスタシステムでは、ノード切り替え機能はご利用いただけません。

HW-RAID 監視機能には以下の機能があります。

◆ HW-RAID 監視機能

RAID ユーティリティを用いてディスクの状態を定期監視します。

ディスクの故障を検出すると syslog に異常レポートを通知します。

RootDiskMonitor による OS ディスク監視の仕組みは以下の図のようになります。

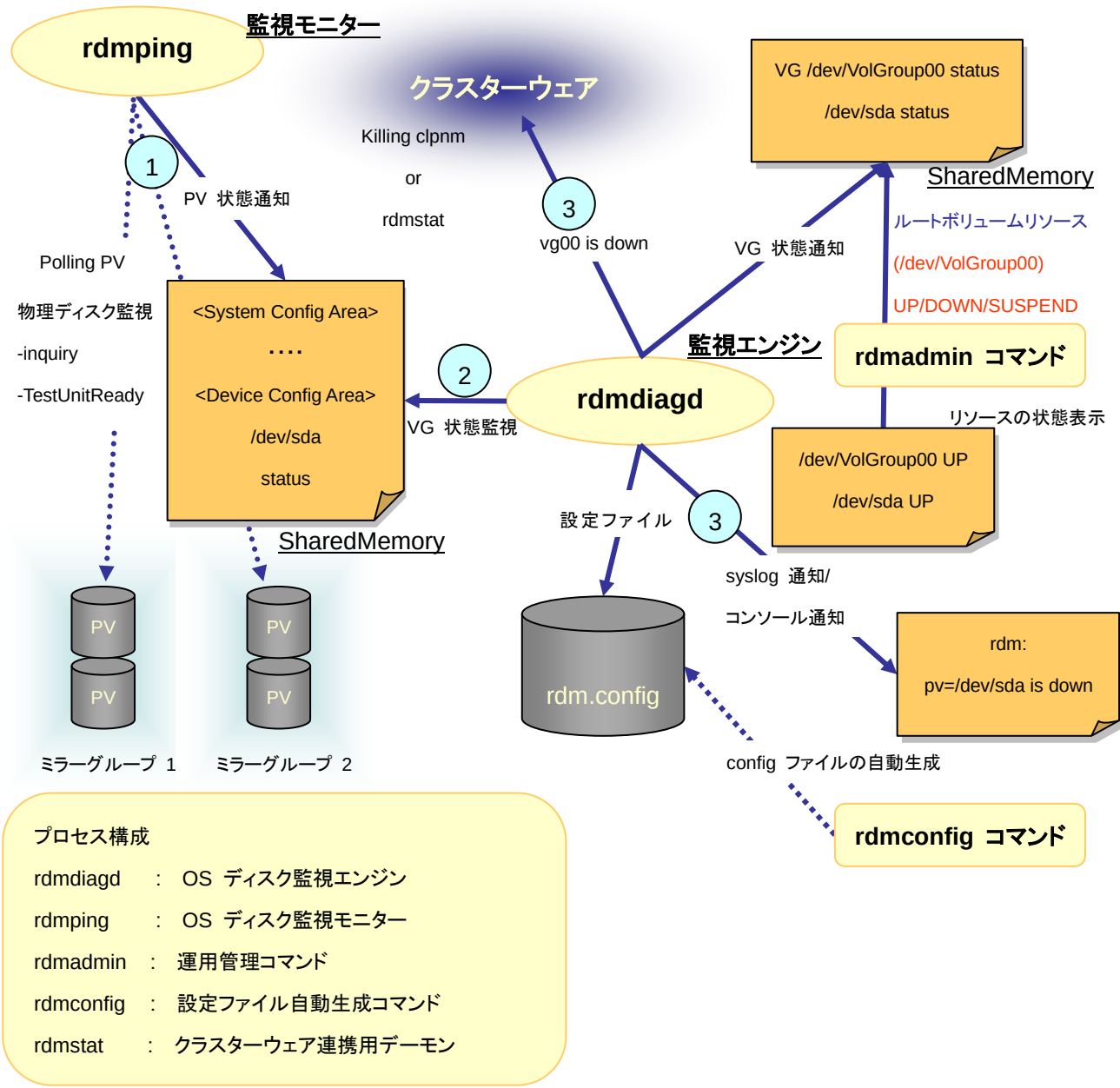


図 2 RootDiskMonitor のプロセスモデル

1

OS ディスクの障害を検知するために、I/O パスに対して定期的に TestI/O を行います。

※OS ディスクを構成する I/O パスが監視対象となります。

※Test I/O は SCSI パススルードライバー経由で SCSI コマンド(Inquiry、TestUnitReady)を発行することで行われます。

Test I/O で監視対象となる項目は、I/O パスの死活監視と、I/O リクエストのストール監視になります。

2

VG の状態を監視/更新します。

3

Test I/Oで異常を検出したI/Oパスは、syslog、コンソールに障害レポートを通知します。

さらに、LUN(論理ディスク装置)へのアクセスが不可能になると、

コンフィグレーションファイルで指定されたアクションを実行します。

I/O パスの状態について

LUN レベルのステータス(I/O パスの監視状態)として、以下の状態をレポートします。

- UP : I/O パスが正常に動作している状態です。
- DOWN : I/O パスに異常があり、利用不可な状態です。

VG レベルのステータス(I/O パスをミラーグループとして束ねた監視状態)として、以下の状態をレポートします。

- UP : VG が正常に動作している状態です。
- SUSPEND : VG を構成するミラー片系の I/O パスに異常がある状態です。
- DOWN : VG に異常があり、利用不可な状態です。

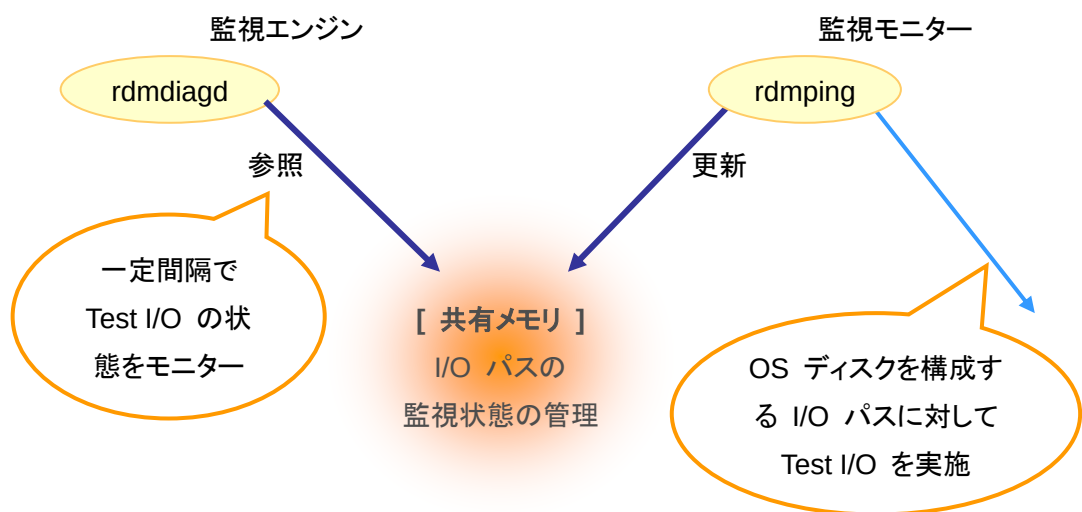
I/O パスの死活監視および、障害レポート機能の動作は以下となります。

OS ディスクを構成するI/O パスに対し定期的にSCSI パススルー機能を利用して

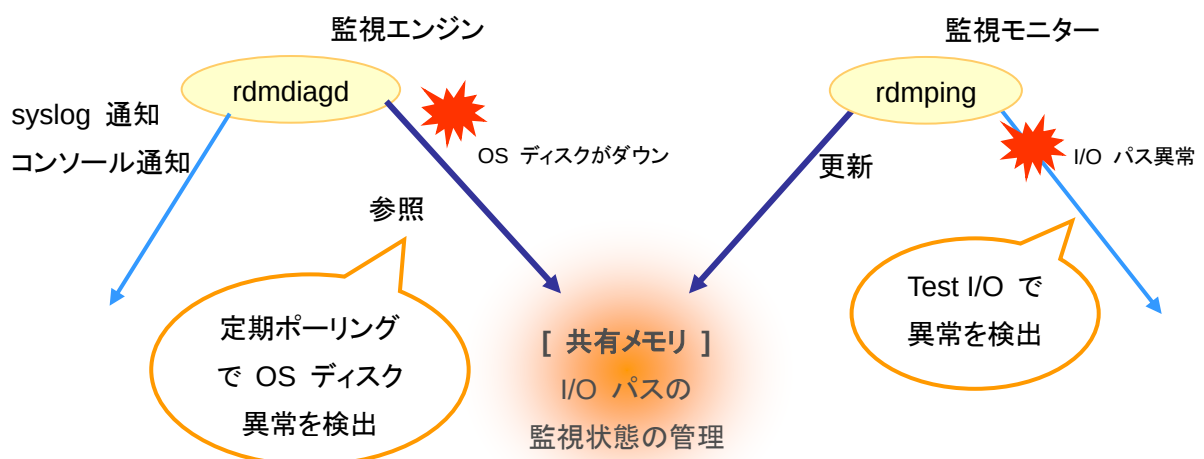
Test I/O を発行することで、I/O パスの動作状態を監視します。

Test I/O が正常終了しない、またはタイムアウトした場合は I/O パスを異常と判定します。

【Test I/O のフレームワーク】

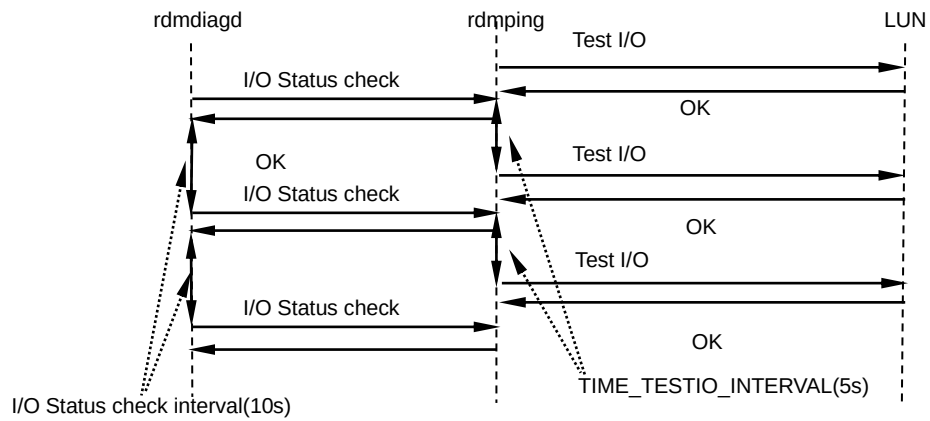


【Test I/O でOS ディスクの異常を検出】



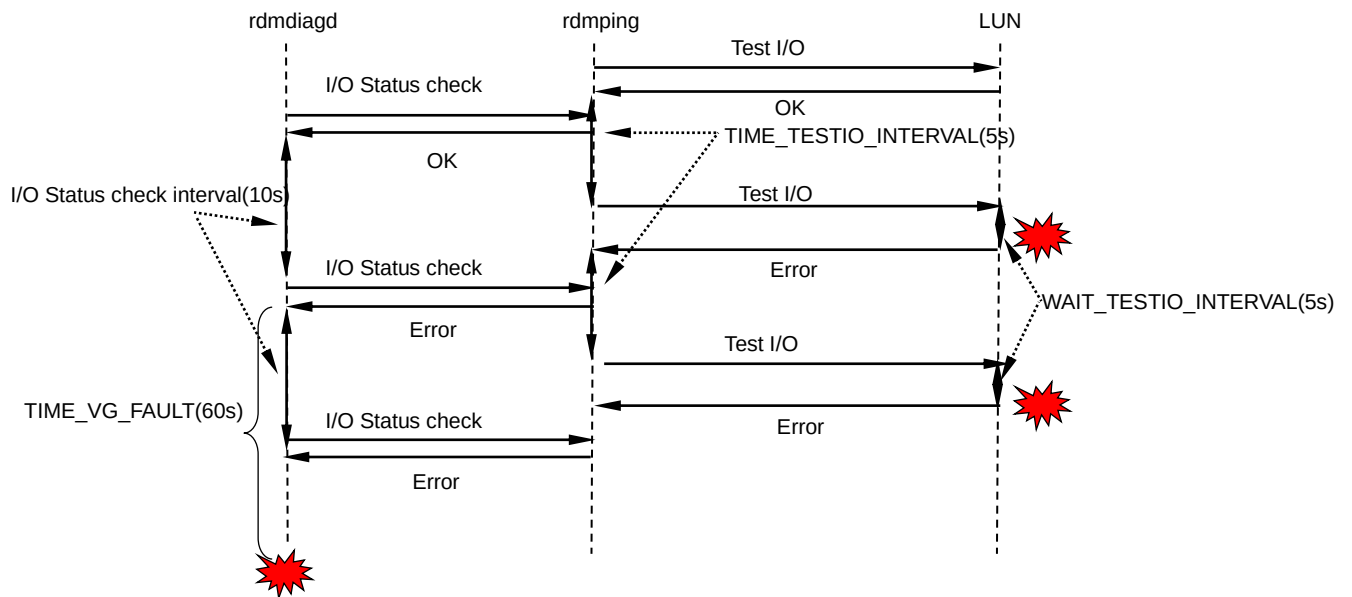
(1) Test I/O の正常なシーケンスは、以下のような動作になります。

基本タイマー(I/O Status Check Interval) :10(秒)
TIME_VG_FAULT :60(秒)
TIME_TESTIO_INTERVAL :5(秒)
WAIT_TESTIO_INTERVAL :5(秒)



(2) Test I/O で異常を検出すると、以下のような動作になります。

基本タイマー(I/O Status Check Interval) :10(秒)
TIME_VG_FAULT :60(秒)
TIME_TESTIO_INTERVAL :5(秒)
WAIT_TESTIO_INTERVAL :5(秒)



タイムオーバー

syslog 通知 or クラスターウェアデーモン強制停止 or rdmstat 停止 or os system dump + panic

3. 監視の設定と実践

それでは、一緒に RootDiskMonitor および HW-RAID 監視機能 を使用してみましょう!

3.1. インストール

まずは RootDiskMonitor および HW-RAID 監視機能 をインストールしましょう。

◆ RootDiskMonitor

RootDiskMonitor は以下の手順でインストールします。

コードワードおよびインストールに関する詳細につきましては同梱の

「CLUSTERPRO MC RootDiskMonitor 2.10 for Linux リリースメモ」をご覧ください。

※ すでに本製品をインストール済みの場合は、以下の手順を行う必要はありません。
次のステップ(HW-RAID 監視機能のインストール)へ進んでください。

(1) rpm コマンドにより、本製品のパッケージをインストールします。

※以下の手順は CD-R 媒体を /mnt/cdrom にマウントした場合の例です。

```
# rpm -ivh /mnt/cdrom/Linux/rpm/clusterpro-mc-rdm-w.x.y-z.x86_64.rpm
```

※w, x, y, z は任意のリビジョン番号が入ります

注意：

- ◆ RootDiskMonitor を使用する場合、sg3_utils がインストールされている必要があります。
本パッケージがインストールされていない場合、事前にインストールしてください。

(2) rpm コマンドにより、本製品が正しくインストールされたことを確認します。

```
# rpm -qa | grep clusterpro-mc-rdm  
clusterpro-mc-rdm-w.x.y-z
```

※w, x, y, z は任意のリビジョン番号が入ります

◆ HW-RAID 監視機能

HW-RAID 監視機能は以下の手順でインストールします。

コードワードおよびインストールに関する詳細につきましては同梱の

「CLUSTERPRO MC RootDiskMonitor 2.10 for Linux HW-RAID 監視機能 リリースメモ」
をご覧ください。

※ すでに本製品をインストール済みの場合は、以下の手順を行う必要はありません。
次のステップ(3.2 章)へ進んでください。

(1) rpm コマンドにより、本製品のパッケージをインストールします。

※以下の手順は CD-R 媒体を /mnt/cdrom にマウントした場合の例です。

```
# rpm -ivh /mnt/cdrom/Linux/option/hwraidmon/rpm/clusterpro-mc-rdmhwraid-w.x.y-z.x86_64.rpm
```

※w, x, y, z は任意のリビジョン番号が入ります

注意：

- ◆ HW-RAID 監視機能を使用する場合、sg3_utils がインストールされている必要があります。また、Universal RAID Utility または、HPE Smart Storage Administrator のいずれかがインストールされている必要があります。各製品がインストールされていない場合、事前にインストールしてください。

(2) rpm コマンドにより、本製品が正しくインストールされたことを確認します。

```
# rpm -qa | grep clusterpro-mc-rdmhwraid  
clusterpro-mc-rdmhwraid-w.x.y-z
```

※w, x, y, z は任意のリビジョン番号が入ります

以上で、RootDiskMonitor および HW-RAID 監視機能のインストールは終了です。

3.2. 設定ファイルの作成

RootDiskMonitor および HW-RAID 監視機能で使用する設定ファイルを作成しましょう。

RootDiskMonitor は以下のファイルを使用します。

- ◆ /opt/HA/RDM/conf/rdm.config

設定ファイルはノード単位に定義するファイルで、監視間隔や障害検出時のアクション、監視対象のデバイス情報等を定義します。

設定ファイル自動生成コマンド /opt/HA/RDM/bin/rdmconfig を利用するとデバイス情報を検索し設定ファイルのテンプレートを自動生成できます。

すでに設定ファイルが存在する場合は、上書き要否を問い合わせますので「Y/N」から Y を選択してください。N を選択すると、設定ファイル自動生成を中止します。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmconfig
```

注意：

- ◆ 設定ファイル自動生成(rdmconfig)サポート対象外の構成の場合、サンプルファイルが /opt/HA/RDM/conf/rdm.config.default として提供されていますので、このファイルをコピーした後に、OS ディスクを構成するデバイス情報を登録してください。

HW-RAID 監視機能は以下のファイルを使用します。

- ◆ /var/opt/HA/HWRAIDMON/conf/rdm_hwraidmon.config
- ◆ /var/opt/HA/HWRAIDMON/conf/rdm_hwraidmon_service.config

設定ファイルはノード単位に定義するファイルで、製品全体の動作や実行するサービス等を定義します。いずれの設定ファイルも特別な要件がないかぎりそのままご使用ください。

3.3. 監視の開始

RootDiskMonitor による OS ディスク監視および HW-RAID 監視機能による HW-RAID 監視を開始しましょう。

◆ RootDiskMonitor による OS ディスク監視

- (1) RootDiskMonitor を起動して、監視をはじめます。

以下のコマンドを root 権限で投入することで起動できます。

【Red Hat Enterprise Linux 7.0 以降、Oracle Linux 7.0 以降、Amazon Linux 2 以降の場合】

```
# systemctl start rdmd
```

【Red Hat Enterprise Linux 6.x、Oracle Linux 6.x の場合】

```
# /etc/init.d/rdmd start
```

- (2) ps コマンドにより RootDiskMonitor のプロセス(rdmdiagd, rdmping)が起動していることを確認します。

```
# ps -ef | grep rdm
root 2169      1 0 10:43:40 ? 0:00 /opt/HA/RDM/bin/rdmdiagd
root 2179 2169 0 10:43:40 ? 0:00 rdmping
```

◆ HW-RAID 監視機能による HW-RAID 監視

- (1) HW-RAID 監視機能を起動して、監視をはじめます。

以下のコマンドを root 権限で投入することで起動できます。

【Red Hat Enterprise Linux 7.0 以降の場合】

```
# systemctl start rdmdhraidmon
```

【Red Hat Enterprise Linux 6.x の場合】

```
# /etc/init.d/rdmdhraidmon start
```

- (2) ps コマンドにより HW-RAID 監視デーモン(rdm_hwraidmon)が
起動していることを確認します。

```
# ps -ef | grep rdm_hwraidmon  
root 2169      1 0 10:43:40 ? 0:00 /opt/HA/HWRAIDMON/bin/rdm_hwraidmon
```


3.4. 監視状態の確認

監視状態を確認しましょう。

◆ RootDiskMonitor による OS ディスク監視

OS ディスクの監視状態を確認します。

監視リソースおよび各リソースの監視状態を表示します。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin
(monitor status = TRUE)
```

		Logical	I/O
type	H/W Path	status	status
VG	/dev/VolGroup00	up	
MIRROR			
PV	/dev/sda	up	up

全ステータスが up になっていることを確認します。

リソース監視の on/off を表示します

VG レベルの監視状態を表示します

I/O パスの論理・物理状態を表示します

◆ HW-RAID 監視機能による HW-RAID 監視

rdmadmin コマンドにて監視状態を確認します。

論理ディスクおよび物理ディスクの監視状態を表示します。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin -c pdstatus
(monitor status = TRUE)
```

		Logical	I/O
type	H/W Path	status	status
VG	VG_NONE	up	
MIRROR			
PV	/dev/sda	up	up
LD	1	Online	
PD	1	Online	
PD	2	Online	
MIRROR			
PV	/dev/sdb	up	up
LD	2	Online	
PD	3	Online	
PD	4	Online	

論理ディスクの状態を表示します

物理ディスクの状態を表示します

3.5. ディスク障害の検知の確認

ディスク障害を擬似的に発生させ、障害が検出されることを確認しましょう。

本章では、シングルディスク構成とソフトミラー構成および HW-RAID 構成における障害検出の動作を確認します。

※HW-RAID 構成については、Universal RAID Utility を使用した構成での手順となります。

HPE Smart Storage Administrator を使用した構成の場合は、擬似的に障害を発生させて確認することはできません。

◆ シングルディスク構成の場合

(1) 障害前に現在の状態をモニタリングします。

# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin (monitor status = TRUE)			
=====			
	:	: Logical	: I/O
type	: H/W Path	: status	: status
=====			
VG	: /dev/VolGroup00	: up	
MIRROR	:	:	
PV	: /dev/sda	: up	: up

VG ステータスが up となっていることを確認

PV ステータスが up となっていることを確認

(2) rdmadmin コマンドの -f [SpecialFile] オプションにて、疑似障害を発生させるディスクを指定します。

指定されたディスクは強制的に I/O ステータスが up から down に変更され擬似的に障害を起こすことができます。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin -c debug -v on -f /dev/sda  
(monitor status = TRUE)  
Change debug value.  
special file = /dev/sda  
0 -> 1
```

約 60 秒後

# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin (monitor status = TRUE)			
=====			
	:	: Logical	: I/O
type	: H/W Path	: status	: status
=====			
VG	: /dev/VolGroup00	: down	
MIRROR	:	:	
PV	: /dev/sda	: down	: down

シングルディスク構成では down となります

メモリ上のステータスを強制的に書き換えます

(3) syslog にメッセージが出力されます。

以下のメッセージが出力されることを確認してください。

```
Apr 19 10:24:24 host1 rdm[16517]: PV down find .(sf=/dev/sda)
Apr 19 10:24:24 host1 rdm[16517]: VG status change down .(vg=/dev/VolGroup00)
```

◆ ソフトミラー構成の場合

(1) 障害前に現在の状態をモニタリングします。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin
(monitor status = TRUE)
```

=====						
	:		:	Logical	:	I/O
type	:	H/W Path	:	status	:	status
=====						
VG	:	/dev/VolGroup00	:	up		
MIRROR	:	:	:			
PV	:	/dev/sda	:	up	:	up
PV	:	/dev/sdb	:	up	:	up

VG ステータスが up となっていることを確認

PV ステータスが up となっていることを確認

(2) rdmadmin コマンドの -f [SpecialFile] オプションにて、ミラーを構成する片方のディスクを指定することで片系障害を発生させます。

指定されたディスクは強制的に I/O ステータスが up から down に変更され擬似的に片系障害を起こすことができます。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin -c debug -v on -f /dev/sdb
(monitor status = TRUE)
Change debug value.
special file = /dev/sdb
0 -> 1
```

約 60 秒後

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin
(monitor status = TRUE)
```

=====						
	:	:	Logical	:	I/O	
type	:	H/W Path	:	status	:	status
=====						
VG	:	/dev/VolGroup00	:	suspend		
MIRROR	:	:	:			
PV	:	/dev/sda	:	up	:	up
PV	:	/dev/sdb	:	down	:	down

ソフトミラー構成では
suspend になります

メモリ上のステータスを
強制的に書き換えます

(3) 片系障害を発生させた場合、syslog にメッセージが出力されます。

以下のメッセージが出力されることを確認してください。

```
Apr 19 10:19:44 host1 rdm[16517]: PV down find .(sf=/dev/sdb)
Apr 19 10:19:44 host1 rdm[16517]: VG status change suspend .(vg=/dev/VolGroup00)
```

- (4) rmdadmin コマンドの -f [SpecialFile] オプションにて、ミラーを構成するもう片方のディスクを指定することで両系障害を発生させます。

すでに片系が異常な状態で、残りの正常なディスクを異常にすることで両系障害を擬似的に起こすことができます。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rmdadmin -c debug -v on -f /dev/sda
(monitor status = TRUE)
Change debug value.
special file = /dev/sda
0 -> 1
```

約 60 秒後

```
# /opt/HA/RDM/bin/rmdadmin
(monitor status = TRUE)
```

```
=====
type      :      : Logical   : I/O
           : H/W Path : status    : status
=====
VG         : /dev/VolGroup00 : down
MIRROR     :               :
PV         : /dev/sda       : down   : down
PV         : /dev/sdb       : down   : down
```

両系障害で down 状態になっていることを確認

メモリ上のステータスを強制的に書き換えます

- (5) 両系障害を発生させた場合、syslog にメッセージが出力されます。

以下のメッセージが出力されることを確認してください。

```
Apr 19 10:24:24 host1 rdm[16517]: PV down find .(sf=/dev/sda)
```

```
Apr 19 10:24:24 host1 rdm[16517]: VG status change down .(vg=/dev/VolGroup00)
```

◆ HW-RAID 構成の場合

- (1) HW-RAID 監視デーモンが起動していることを確認します。

```
# ps -ef | grep rdm_hwraidmon
root 59651 1 0 12:00 ? 00:00:00 /opt/HA/HWRAIDMON/bin/rdm_hwraidmon
```

起動していない場合は以下の手順で起動してください。

【Red Hat Enterprise Linux 7.0 以降の場合】

```
# systemctl start rdmdhwraidmon
```

【Red Hat Enterprise Linux 6.x の場合】

```
# /etc/init.d/rdmdhwraidmon start
```

- (2) Universal RAID Utility の RAID システム管理モードを確認します。

```
# raidcmd runmode
Standard Mode
```

- (3) RAID システム管理モードが Standard Mode の場合は、以下のコマンドにて管理モードを変更します。

既に Advanced Mode の場合は、この手順は不要です。

```
# raidcmd runmode -md=a
Changed RAID System Management Mode to "Advanced Mode".
```

- (4) RAID コントローラーの情報を参照します。

障害状態にする物理ディスクの情報を確認します。

```
# raidcmd property -tg=all
:
RAID Controller #1 Physical Device #3
ID : 3
Enclosure : 1
Slot : 4
Device Type : HDD
Interface : SAS
Vendor/Model : SEAGATE ST973402SS
Firmware Versio : 0002
Serial Number : 3NP1JVQZ
Capacity : 67GB
Status : Online
S.M.A.R.T. : Normal
```

RAID Controller で示される番号が RAID コントローラー番号、

Physical Device で示される番号が物理ディスク番号となります。

上記の例では、RAID コントローラー番号が 1、物理ディスク番号が 3 となります。

- (5) PD3 を障害状態に強制変更します。

```
# raidcmd stspd -c=1 -p=3 -st=offline
Make the Physical Device #3 offline.
[Warning]
The redundancy of Logical Drive will be lost.
Do you continue ? [yes(y) or no(n)] :
```

-c はRAID コントローラー番号、-p は物理ディスク番号を指定します。

上記ではコントローラー番号 1、物理ディスク番号 3 を指定しています。

(6) PD3 が障害状態になっていることを確認します。

```
# raidcmd property -tg=pd -c=1 -p=3
RAID Controller #1 Physical Device #3
ID : 3
Enclosure : 1
Slot : 4
Device Type : HDD
Interface : SAS
Vendor/Model : SEAGATE ST973402SS
Firmware Version : 0002
Serial Number : 3NP1JVQZ
Capacity : 67GB
Status : Failed
S.M.A.R.T. : Normal
```

Status が Failed に
なっていることを確認

-tg は出力範囲を指定します。

上記では物理ディスクの状態を出力するため pd を指定しています。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin -c pdstatus
(monитор status = TRUE)
```

```
=====
type      :      : Logical : I/O
           : H/W Path : status : status
=====
VG         : VG_NONE : up
MIRROR    :
PV         : /dev/sda  : up      : up
LD         : 1         : Online
PD         : 1         : Online
PD         : 2         : Online
MIRROR    :
PV         : /dev/sdb   : up      : up
LD         : 2         : Degraded
PD         : 3         : Failed
PD         : 4         : Online
```

Failed になっていることを確認

(7) 監視のタイミングで障害検出メッセージが syslog に出力されていることを確認します。

デフォルトでは最大 3600 秒かかります。

```
# view /var/log/messages
Sep 14 13:00:14 host1 rdm_hwraidmon[21520]: LD2 [/dev/sdb] status is Degraded.
Sep 14 13:00:14 host1 rdm_hwraidmon[21520]: PD3 [/dev/sdb] status is Failed.
```

以上で、ディスク障害の検知の確認は終了です。

3.6. 監視の復旧

3.5 章で発生させた擬似障害状態を `rdmadmin` コマンドにて復旧させます。

◆ シングルディスク構成の場合

- (1) 擬似障害を発生させた物理ディスク(/dev/sda)の擬似障害の復旧を行います。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin -c debug -v off -f /dev/sda
Change debug value.
special file = /dev/sda
1 -> 0
```

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin
(monitor status = TRUE)
```

```
=====
type      :      : Logical : I/O
           : H/W Path : status : status
=====
VG         : /dev/VolGroup00 : up
MIRROR     :               :
PV         : /dev/sda       : up      : up
```

up になることを確認します

up になることを確認します

- (2) syslog メッセージを確認してください。

```
Apr 19 11:57:40 host1 rdm[16517]: VG status change up.(vg=/dev/VolGroup00)
```

◆ ソフトミラー構成の場合

- (1) 擬似障害を発生させた物理ディスク(/dev/sda, /dev/sdb)の擬似障害の復旧を行います。

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin -c debug -v off -f /dev/sda
Change debug value.
special file = /dev/sda
1 -> 0
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin -c debug -v off -f /dev/sdb
Change debug value.
special file = /dev/sdb
1 -> 0
```

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin
(monitor status = TRUE)
```

```
=====
type      :      : Logical : I/O
           : H/W Path : status : status
=====
VG         : /dev/VolGroup00 : up
MIRROR     :               :
PV         : /dev/sda       : up      : up
PV         : /dev/sdb       : up      : up
```

up になることを確認します

up になることを確認します

- (2) syslog メッセージを確認してください。

```
Apr 19 11:57:40 host1 rdm[16517]: VG status change up.(vg=/dev/VolGroup00)
```

◆ HW-RAID 構成の場合

(1) PD3 を正常状態に強制変更します。

```
# raidcmd stspd -c=1 -p=3 -st=online
Make the Physical Device #3 online
[Warning]
The redundancy of Logical Drive will be lost.
Do you continue ? [yes(y) or no(n)] :
```

(2) PD3 が正常状態になっていることを確認します。

```
# raidcmd property -tg=pd -c=1 -p=3
RAID Controller #1 Physical Device #3
ID                : 3
Enclosure         : 1
Slot              : 4
Device Type       : HDD
Interfac          : SAS
Vendor/Model      : SEAGATE ST973402SS
Firmware Version  : 0002
Serial Number     : 3NP1JVQZ
Capacity          : 67GB
Status            : Online
S.M.A.R.T.        : Normal
```

Online になることを確認します

```
# /opt/HA/RDM/bin/rdmadmin -c pdstatus
(monitor status = TRUE)
```

```
=====
type          : Logical : I/O
               : H/W Path : status : status
=====
VG            : VG_NONE : up
MIRROR       :
PV           : /dev/sda  : up    : up
LD           : 1        : Online
PD           : 1        : Online
PD           : 2        : Online
MIRROR       :
PV           : /dev/sdb  : up    : up
LD           : 2 : Online
PD           : 3 : Online
PD           : 4 : Online
```

Online になることを確認します

(3) 管理モードを変更した場合は元に戻します。

管理モードを変更していない場合はこの手順は不要です。

```
# raidcmd runmode -md=s
Changed RAID System Management Mode to "Standard Mode".
```

以上で、監視の復旧は終了です。

3.7. 監視の終了

RootDiskMonitor による OS ディスク監視および HW-RAID 監視機能による HW-RAID 監視の終了手順を確認しましょう。

◆ RootDiskMonitor による OS ディスク監視

- (1) RootDiskMonitor を停止して、監視を終了します。

以下のコマンドを root 権限で投入することで停止できます。

【Red Hat Enterprise Linux 7.0 以降、Oracle Linux 7.0 以降、
Amazon Linux2 以降の場合】

```
# systemctl stop rdmd
```

【Red Hat Enterprise Linux 6.x、Oracle Linux 6.x の場合】

```
# /etc/init.d/rdmd stop
```

- (2) ps コマンドにより RootDiskMonitor のプロセス(rdmddiagd, rdmping)が
停止していることを確認します。

rdmddiagd および rdmping が表示されないことを確認します。

```
# ps -ef | grep rdm
```

◆ HW-RAID 監視機能による HW-RAID 監視

- (1) HW-RAID 監視機能を停止して、監視を終了します。

以下のコマンドを root 権限で投入することで停止できます。

【Red Hat Enterprise Linux 7.0 以降の場合】

```
# systemctl stop rdmhwraidmon
```

【Red Hat Enterprise Linux 6.x の場合】

```
# /etc/init.d/rdmhwraidmon stop
```

- (2) ps コマンドにより HW-RAID 監視デーモン(rdm_hwraidmon)が
停止していることを確認します。

rdm_hwraidmon が表示されないことを確認します。

```
# ps -ef | grep rdm_hwraidmon
```

4. おわりに

以上、RootDiskMonitor および HW-RAID 監視機能の基本的な動作となります。
また、この他にも I/O ストールの監視やクラスターウェア連携など、システムにあわせた監視を行うことができます。

各機能の詳細については、

「CLUSTERPRO MC RootDiskMonitor 2.10 for Linux ユーザーズガイド」

および

「CLUSTERPRO MC RootDiskMonitor 2.10 for Linux HW-RAID 監視機能 ユーザーズガイド」
をご覧ください。

CLUSTERPRO
MC RootDiskMonitor 2.10 for Linux
はじめての RootDiskMonitor

2025 年 4 月 第 12 版
日本電気株式会社
東京都港区芝五丁目 7 番地 1 号
TEL (03) 3454-1111(代表)

© NEC Corporation 2025

日本電気株式会社の許可なく複製、改変などを行うことはできません。
本書の内容に関しては将来予告なしに変更することがあります。

保護用紙